

令和8年度第5回 感染症発生動向調査協議会

令和8年8月19日

月番：加藤 達雄（感染症全般）、高橋 義人（STI）

1 前月の感染症発生動向について（2026年第27週～31週・7月）

＜全数把握対象疾患＞

- ・結核は16例の報告があり、高齢者が中心であった。潜在性結核感染症は13例の報告があり、主に若年者であった。結核の累計報告数は、対前年比99.2%であり、横ばいであった。
- ・30週に重症熱性血小板減少症候群(SFTS ウイルス)の報告があり、本年2例目である。
- ・レジオネラ症の10例の報告があった。月当たりの報告数としては多い。
- ・百日咳の報告数は減少し、累計で対前年度6.7%に減少している。

(STI)

- ・梅毒：男性4例 女性5例

症例数としては、例月と変わりはない。女性に年齢分布に偏りはなかった。女性の2例を除いて顕性梅毒であった。本年の積算と比べると今回は女性の比率が高く、女性の年齢分布に偏在がなかった。感染機会が確認できたのは男性で38%、女性で21%。個人情報重視の視点もあり、感染機会の確認の難度が高い印象。感染機会、リスクの啓蒙につなげることが難しい。

- ・HIV感染症：今回は認めず

現在までの積算症例数は10例で、一昨年 of 年間症例数16例と同等、昨年の年間症例数12例よりは多くなる可能性が危惧される。

＜定点把握対象疾患＞

- ・新型コロナ感染症は、例年みられる夏季の流行がみられなかった。
- ・手足口病は、対前月比444.1%で、対前年度1289.7%と大きな流行であったが、28週をピークに減少に転じている。

(STI)

- ・性器クラミジア：一昨年、昨年と比較して男女ともに減少傾向。症例は男性のほうが少ない。
- ・性器ヘルペス：一昨年、昨年と同等であり、男女差も認めない。
- ・尖圭コンジローマ：一昨年、昨年と同等。症例数は男性が多い。好発部位の差。
- ・淋菌感染症 一昨年、昨年と比較して男性は減少傾向、女性は同等。

2 検討すべき課題

- ・重症熱性血小板減少症候群の発生状況（全国で、本年も過去最多の昨年並みのペース）

3 情報提供すべき事項

- ・呼吸器感染症予防週間 9月24日～9月30日

4 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・特になし

<検討結果>